様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	臨床心理士養成コース／小倉　正義

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1．目標・計画

コース以外の講義・演習では，「子ども理解と生徒指導」「カウンセリング論」「生徒指導論」「発達心理学」「発達臨床心理アセスメント」「阿波学」を担当しており，教育相談・生徒指導に関連する分野が中心であり，大講義のものが多い。またほとんどがオムニバス形式の講義であるが，担当教員間で連携をしっかりと行い，講義の目的を達成できるように留意したい。
①授業内容：教育相談・生徒指導に関して基礎的なことを大切にしながら，今日的な課題まで幅広く網羅したい。また，教師として実践に活用できる心理学の知についてできる限り取り扱いたい。
②授業方法：「自ら考える力」を育てるために，講義形式の授業であるが，一人一人の学生が参加できるような方法を提案していきたい。様々な学生がいるので，参加形態も一通りにするのではなく，様々な形での参加を尊重していきたい。
③成績評価：テストやレポートの中で，知識が積み上げられているかどうかと，その知識を自分で使うことができるかを問い評価できるようにしたい。大講義はテストで評価をするものが多いが，テストを受けること自体が学びにつながるようなテストを作成したい。

また，臨床心理士養成コースでは，様々な演習と教育実践フィールド研究を担当している。
①授業内容：当然のことだがそれぞれの演習や実習の目的を達成できるよう，より実践性のある内容を行う
②授業方法：演習形式とはいっても人数が多いので，一方的な講義にならないように留意する。グループワークや体験的内容を中心に構成し，その中で感じたこと・考えたことを表現していくことができるような工夫を行う。一人一人学生のタイプも違うので，その点にも留意したい。
③成績評価：参加意欲や参加態度，演習や実習の過程で何を学んでいるかを随時確認しながら，評価自体が学びのプロセスになるように留意したい。
臨床心理士養成コースでも現職教員の方がいらっしゃるので，現場に帰ったときに高度専門職業人として活躍できるような専門性をもてるように，本人たちのニーズも考慮しながら，授業を構成していくことが重要である。

2. 点検・評価

コース以外の講義・演習では，「子ども理解と生徒指導」「カウンセリング論」「生徒指導論」「発達心理学」「発達臨床心理アセスメント」「阿波学」を担当した。目標に書いたようにすべてオムニバス形式の講義であるが，自分の役割や担当教員間の連携を意識してとりくめた。
例えば，「子ども理解と生徒指導」では新たにゲストスピーカーを招き，より多面的な視点をもってもらえるように工夫した。
また，「生徒指導論」では，今年度よりA・Bに授業が分かれたが，担当箇所の見直しや新たに現職教員とのディスカッションを取り入れるなど工夫して取り組んだ。
①授業内容：生徒指導・教育相談の基礎的な内容をできる限りテストで問うことで，定着できるように意識した。また，ゲスト講師を招くなど，これまで以上に実践的で学生の心に届く授業を工夫した。
②授業方法：「自ら考える力」を育てるために，講義形式の授業であるが，一人一人の学生が参加できるように工夫した。
③成績評価：テストやレポートの中で，知識が積み上げられているかどうかと，その知識を自分で使うことができるかを問い，評価が次につながるように工夫した。

また，臨床心理士養成コースでは，臨床心理コロキアム，精神医学文献演習，臨床心理面接演習，臨床心理査定演習，臨床心理基礎実習，臨床心理実習，面接指導基礎実習，面接指導実習，課題研究，教育実践フィールド研究を担当した
①授業内容：当該演習や実習の目的を達成できるよう，より実践性の高い内容を取り入れた。
②授業方法：演習形式とはいっても40人以上の講義が多いので，一方的な講義にならないように留意した。これまでも実践してきたことであるが必要に応じて，小グループに分かれて学べる機会を積極的に設けた。すべての演習で，グループワークや体験的内容を中心に構成し，その中で感じたこと・考えたことを表現し，考えを深めることができるような工夫を行った。そのなかで，一人一人学生に応じた配慮や教育ができたのではないかと思われる。
③成績評価：参加意欲や参加態度，演習や実習の過程で何を学んでいるかを随時確認するようにした。評価自体が学びのプロセスになるように留意することで，自律的な学習に向かうことができるのではないかと考えて，実践した。

臨床心理士養成コースにも現職教員が多くいらっしゃるので，現場に帰ったときに高度専門職業人として活躍できるような専門性をもてるように，本人たちのニーズも考慮しながら，授業を構成した。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①学部教育では，大人数の講義であっても学生が主体的に授業に参加できるよう，体験的なワークを多く取り入れるなど方法を工夫する。演習の授業では，学生の特性もとらえながら内容・方法を考え，より実践力をつけることができるようにしたい。また，卒論（3年生・4年生）の指導では，卒論作成に向けて主体的に自らのテーマに取り組むことができるように指導したい。
②大学院では，講義・演習やケースのスーパービジョン，勉強会等を通して，臨床心理士の基礎的な力を養成し，臨床心理士の資格試験に必要な知識を伝える。また研究指導では，研究者的な視点の養成を行う。
③特にゼミ生（4年生，M1，M2）を中心に，論文指導の中で研究指導はもちろんのこと，文章の論理展開の組み方や言葉の使い方についてもしっかり指導する。
④講義や演習，ゼミ等のなかで，学生の進路指導や職業意識を育てることもできるように工夫する。
⑤その他，教員として大学生・大学院生の自己理解やメンタルヘルスをサポートする。またサポートできる体制を提案していく。

2．点検・評価

①前述したが，大人数の講義であっても可能な範囲で学生が自ら考えられるような授業展開を工夫した。2013年度は卒論指導は4年生4人であったが，前期では自らが興味がもったことを研究の形にしていく初期段階の指導を行い，後期は実際に調査を行い，文章にする中で，教育的課題をどのようにとらえ，目の前の子どもたちにどのように向き合えばよいかを考えてもらう時間になるように努力した。また，卒論に関する話だけでなく，個人としての成長も促せるようにできるだけ対話をするように心がけた。
②大学院では，講義や演習，ケースのスーパービジョン，勉強会を通して，臨床心理士として必要な基礎的な知識や技能の習得，心構えを伝えられるように工夫した。研究指導でも，修士論文を書くことが目標になってしまわないように，研究の意義を理解できるように工夫した。
③繰り返しになるが，ゼミ生を中心に，本人にとって卒論・修論を書くことが，教員や臨床心理士として，また社会人として必要な様々な学びにつながるように指導した。
④「教師として」「臨床心理士として」の専門性について考えることができるように，また自分が職業人として生きていくことの意味を考えることができるように指導できたと思っている。
⑤講義や演習の内容だけでなく，折に触れて話をできる機会を持ち，学生の自分づくりをサポートできるように心がけてきた。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

①発達障害者の支援（特に認知的個性に関する研究，高校生・大学生への支援についての研究，インターネット利用についての研究を中心に），中高生のメンタルヘルス（ネットいじめ，インターネット依存に関する研究，不登校の子どもたちへの支援を中心に），保護者支援（ペアレント・メンターに関する研究を中心に）の3つのテーマを中心に，実践性の高い研究を行う。
②単著・共著含めてA論文を2本以上投稿する。
③国際学会・国内学会ともに必要な成果発表を行う。
④科研費をベースに研究をすすめるが，必要に応じて外部資金の獲得を行う。

2．点検・評価

①予定通り，発達障害者の支援（特に認知的個性に関する研究，高校生・大学生への支援についての研究，インターネット利用についての研究を中心に），中高生のメンタルヘルス（ネットいじめ，インターネット依存に関する研究，不登校の子どもたちへの支援を中心に），保護者支援（ペアレント・メンターに関する研究を中心に）3つのテーマを軸にして，様々な研究に取り組んだ。
②共著でA論文3本採択（心理臨床学研究・児童青年精神医学とその近接領域，Brain＆Development）され，1本投稿準備をしている状態である。
③ヨーロッパ児童青年精神医学会，日本心理臨床学会，日本児童青年精神医学会，日本小児精神神経学会で研究発表を行った。
④科研費の研究代表者として「インターネットいじめの予防に関する包括的研究」，分担研究者として「発達障害や学習困難をもつ小中学生の認知的個性を活かす特別支援の方策に関する研究」をすすめた。分担研究は最終年度であったため，最終報告書の作成し，成果報告を行った。また，安心ネットづくり促進協議会の助成金を得て「発達障害のある青少年のインターネット利用に関する研究」を行った。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

①大学の運営組織や運営目的をしっかりと意識し，研究や教育実践に取り組む
②臨床心理士養成コース内での責務を果たす。コース長，副コース長等を積極的にサポートする
③今年度は委員は担当しない予定だが，委員を務めている教員のサポートを積極的に行う
④大学院の広報活動を積極的に行う。昨年度に引き続き愛知県周辺の大学に説明会・資料配付に赴く。

2．点検・評価

①予定通り，大学の運営組織や運営目的をしっかりと意識し，研究や教育実践に取り組んだ。
②コース内での責務を果たし，コース長や副コース長，心理教育相談室長など，他の教員とサポートしあうことができるように工夫した。
③予定通り委員を務めている教員のサポートをできる限り行った。なお，免許更新制高度化のための調査研究事業のワーキンググループの一員，いじめ等生徒指導推進事業の運営委員として事業にかなり貢献した。
④中部大学，三重大学にて大学生や教員を対象に，関西大学では教員を対象に大学院入試説明を行った。この訪問が少なからず実際の受験につながったと考えている。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

①昨年度に引き続き附属小学校におけるスクールカウンセラーとして，特に附属学校の教育相談や特別支援教育の部門での連携を図りたい（附属学校）。
②徳島県教育委員会や徳島市教育委員会など学校教育分野で各機関の連携し，様々なニーズのある子どもたちやその保護者への支援を行う（社会貢献）
③徳島県発達障害者支援センターなど県内外の各機関との連携を行い，発達障害の子どもたちとその保護者の方々への支援システムの構築に貢献する（社会貢献）
④研究成果などを積極的に社会に還元するために，講演や研修会活動を積極的に行う（社会貢献）
⑤その他，研究者や大学教員として，社会に貢献できることを常に考え実践する（社会貢献）

2．点検・評価

①予定通り，附属小学校でのスクールカウンセリングを行っており，教育相談や特別支援教育の部門での貢献，学校との連携を図った。
②徳島県教育委員会，徳島市教育委員会の様々な委員をつとめた。また，臨床心理士として様々なニーズのある子どもたちやその保護者への支援に直接・間接的に携わった。
③徳島県発達障害者支援センター，和歌山県発達障害者支援センターと連携し，各県でのペアレント・メンター活動の推進に貢献した。ペアレント・メンター事業については，日本ペアレント・メンター研究会の理事として，全国のペアレント・メンター活動の推進に貢献できるように準備をすすめてきた。また，各地の親の会の事業にも積極的に協力し，発達障害のある子どもとその家族への支援の広まりに貢献してきた。
④学校や地域から依頼があれば，積極的に講演会や研修会を行ってきた。
⑤研究者や大学教員として，地域社会に貢献できることを常に考えながら，実践するようにしてきた。大学の地域貢献事業としての，教育支援講師・アドバイザー事業，子どもサポーター認証事業，なるっ子わくわく教室などの事業にも今年度も積極的に関わった。
⑥徳島県臨床心理士会の事務局長として，地域の専門家集団としての会の運営にかなり貢献した。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

①学長裁量経費「プロジェクト経費」を受けて，一人一人の支援ニーズに応じるための学生支援体制の整備を進めてきた。他大学への視察や全国の状況を調査し，準備を進めてきたが，2014年度以降に具体的なシステム作りを提言していきたいと考えている。学生のメンタルヘルスの増進や一人一人のニーズに応えていくようなシステム作りは，将来教員になるための学生を育てるために必要不可欠であると考えている。
②文部科学省の受託事業であるいじめ対策等生徒指導推進事業では，中心的な役割を果たし，様々な方々の協力を得ながら事業の推進やまとめに貢献した。